

第2分科会 第1分散会

I. はじめに

今回初めて長野の地で全人教大会が開催された。戦後、長野県での「同和」教育のスタートは、1950年に起きた小学校での給食にかかわる差別事件が契機となりました。そして1950年代から70年代には部落の若者の尊い命が次々に次々に奪われました。このことから先人たちが伝えてきた「差別の現実から深く学べ」という思いが、この全人教大会で具現されていくために、今大会の意義は大きい。

II. 報告について（報告順）

- ①「まだ、見えないものを求めて」（新潟県同教／新発田市立住吉小学校・小栗 玲さん）
小栗さんの報告を通してわたしたちが確認したことは、子どもとかかわるとき、人とかかわるとき、自分の中にある「何」を通してつながろうとしているのか、ということであった。とりわけ、そこに差別問題があるときには、本気で被差別の側の思いを受けとめようとしている自分なのかが問われている。
- ②「Eのおかげでフィリピンのことが好きになってきた」（東京都同教／都立荒川商業高等学校全日制・野村頼和さん）野村さんの報告を通して伝わったことは、自主活動とは何か、子どもたちが解放されていくために居場所とは何か、ということであった。外文研を立ち上げていく経過とともに、そこで揺れ動く野村さんの姿も明らかになった。報告の中の、「差別を脇に置いている間は居心地が悪い。どちらもしんどいのであれば、より誠実な方を選べばいい」という言葉には外文研に対する野村さんの覚悟も感じる事ができた。
- ③「世界でただ一人、かけがえのない『私』に気付くために」（徳島県人教／小松島市立小松島中学校・吉本哲也さん）吉本さんの報告では、子どもたちの自己肯定感、すなわち「世界でただ一人のかけがえのない『わたし』に気づく」ためにつくり上げた夢プロジェクト、そしてそのとりくみが学校での全体人権学習、部落内でのふれ愛子ども会活動ともつながりながら、一層強固なものにしていこうとする学校総体での実践が紹介された。
- ④「ウチナーを子どもたちに～沖縄修学旅行を軸にした平和学習～」（大阪市人教／市立木津中学校・神山卓也さん）神山さんの報告からは、木津中学校の子どもたちの生活仮題が差し出されながら、だからこそオキナワなのだ、だからこそ平和学習なのだ、とい

うことを報告された。そしてオキナワ学習をくぐって卒業した卒業生レイコさんの言葉も紹介された。「バイトの友だちと沖縄に行ったとき、わたしの提案でみんなを『ひめゆりの塔』に連れて行ってん」というその言葉には、木津中学校の取組が子どもの未来につながっているということに気づかせてくれた。

⑤「「差別」をなくすためになすべきこと～中級部生徒による実践活動をつうじて～」(群馬県同教/群馬朝鮮初中級学校・崔成柱さん) 崔さんの報告からは、朝鮮学校の子どもたちが自分たちのルーツをしっかりと見つめることを出発点にしながら、「差別はどこから始まるのか」「自分たちがやるべきことは何なのか」という問いに対する答えを、科学的な学習と自主活動を通して獲得していく姿が明らかになった。在日4世・5世の子どもたちが生きる今は、好転している面もあるが、やはり何らかの差別を感じながら生きていると崔さんは言う。そんな中で、多くの人々が行き交う前橋駅で街頭アンケートを子どもたちは行ったのだ。「在日朝鮮人をしていていますか?」「在日朝鮮人のイメージはどうですか?」……こうしたアンケートを不安を抱きながらもやり切った子どもたちにたくましさを感じた。

⑥「大切な部落をつなぎたい」(長野県実行委員会・人権センターながの・高橋かおりさん) 高橋さんは、長男の結婚差別に際して、自分がどう向き合い、なかまに相談し、そして家族とともにどうたたかってきたのかをわたしたちに真っ直ぐ伝えた。「こんな家に生まれてこなければよかった」と何でも、「部落」のせいにして生きてきた高橋さんは、「自分の子どもたちには、自分のようになって欲しくない」と幼い頃から自分の子どもたちに部落の話を伝え続けてきたという。長男の結婚差別をきっかけに、「わたしもこんなふうになっちゃうのかな」と不安に揺れ動く娘たち。そこから高橋さんの新たな差別との闘いが始まった。今では長男夫婦、3人の孫、2人の娘、夫の9人で暮らしているが、まだ相手方とのつながりは絶たれたままだ。しかし、いつかは孫たちを真ん中に、同じ家族として笑い合いたい、そんな展望も抱いている。「差別の現実から深く学ぶ」ことから実践は始まるのだという原点をとらえ直させる報告であった。

Ⅲ. 論議と交流の中で

①報告に対して「もっと素直になって人としてAや父親にかかわってほしい」という出席者からの励ましがあつた。多くの義務感を背負わされている教員としてではなく、一人の人間としてまず自分のことを語って欲しいという発言があつた。これに関わって総括討論の中で出された「部落問題は自分の中にこそある」という言葉は、わたしたち全員が受けとめなければならない。

②「子どもたちをなるべく多くの人と出会わせたい」「共に立ち上がるなかまを一人でも多くつくっていきたい」という意見があった。今日の社会にある、部落差別をはじめとするあらゆる差別状況をとらえる目は、集団の質が高まるにつれて鋭くなっていく。学級にいる、同じ友だちの中にこのような差別問題を抱えているなかまがいることを確認することが必要になる。「立場宣言」がこれにあたる。これまでの「自主活動」分科会でも、幾度となく「立場宣言」に関わる論議が繰り返されてきた。この論議は「自主活動とは何か」という、自主活動の本質に迫るものでもあるのだ。自主活動の本来的な目的は、「部落差別をなくす力をもつ子どもを育てる」ことであり、その原点は「自らの力で差別をなくす」ために生まれた水平社運動である。そのことに今日的な意味を重ねて考えると、「なかまとともに差別をなくしていくために、まず、反差別のなかまを増やす」ことになる。そして「なぜ立場宣言なのか」ということを考えると、それは「なかまになるため」だということが分かる。よって、立場宣言は「させる」ものでは決してない。被差別の立場の子どもが、親の支え、同じ立場のなかまの支え、教職員の支えをバックボーンに、自らの生き方を切り拓いていく、解放運動の第一歩でなければならないのだ。その行為の先に、必ず、共に立ち上がるなかまが生まれるのだ。そして、かかわる教職員は安心して「立場宣言ができる」なかまづくり、困ったときに安心してSOSを出せるなかまづくりを学校総体で進めなければならない。さらに何よりも自分自身が「どこに立って、同和教育・人権教育にとりくむのか」という立ち位置を明らかにすることが求められている。

IV. 残された課題

- ①子どもたちや親、地域の差別の現実から深く学び、具体的にどう行動していくか。
- ②被差別の側の子どもたちの立ち上がりを、学びの子どもたちがどのように支えようとしているのか。
- ③学校総体で取り組んでいることはわかるが、そのことが差別をなくす力にどうつながっているのかが見えなかった。

第2分科会 第2分散会

【討論の概要】

自主活動の討議課題として、4つの討議の柱を設け、私達は「差別の現実は何を学び」「どの位置に立ち」「子どもたちの立ち上がりはどうつなげていくか」を明らかにしたいとし、5本の報告を進めました。

大阪府人連（大東市立四条小学校）中野時子さん「『学校大好き』をめざして」の報告は、厳しい家庭環境にあるAにとって学校が安心できる場所にしたいという思いで家庭訪問を繰り返した。家庭とつながりを深めることで祖母、母親とつながり、Aとのつながりを深め、自分を大切にしてくれる大人が学校にいることをAの心に根付かせていく。学級では人間関係づくりの授業や日常的な取り組みにより、Aだけでなくみんなの安心できる居場所作りに努め、子どもどうしがつながり、Aが変容していく姿が見られた。というものでした。

会場からは嘘をつかざるを得なかったAの厳しい生活の事実や差別の現実が見えてこないという視点の質問が出され、上に挙げた「差別の現実は何を学び」という課題が充分には深められませんでした。しかしながらAは、担任を初めとする教員の家庭訪問や子ども同士の取り組みを通して、繋がり初めます。差別の現実を明らかにしないままの実践では、次には進めないという分散会の課題が明らかにされる事でもありました。

長野県実行委員会（長野県安曇養護学校）小林妃都美さん「部落を伝える」では、人権啓発ポスターを見て「部落差別ってなんだかわからないや」と娘に言われ、自宅に戻り「部落とはお母さんのことです」と語った。その一言を軸に、解放子ども会や出身教師の会、養護学校などでの、自分がこれまで出会った地域の大人たち、教師、同僚、子どもたちや親、そして父母、自分を取り巻くすべての人に温かく支えられてこれまで来たことに気づいた。そういう機会のない今、これからどのように部落を知り、向き合い、自分の子どもや関わる子どもたちにどう繋げていくのかという報告があった。

会場からは、自分にとっての部落とはどういうものか、部落出身教師から出身を伝えるときの葛藤、また解放子ども会などが減り伝えていく場が少なくなった今、どのように子どもに部落を伝えていくのかの意見が出され討論された。子どもたちの差別の現実や部落認識に何を学び、子どもの差別への問いに返していけている教師であるか、どの立ち位置でどう返していけるか、教師一人ひとりの感性や立ち位置が問われるものでした。

埼玉県人教 秋山二三夫さん、埼玉県立本庄高校永井良介さん・小林洋平さん「298人の生徒たちとともに5年目の夏を迎えて～本庄高校東日本大震災東北復興ボラン

ティア～」では、「知った者には知らせる責任がある」をモットーに2011年から活動が続いている本庄高校での東日本復興支援ボランティア。参加した生徒の中でも「自分の設定を変えたい」と言ったペルー人のA、中学生の頃に東北で被災したつらい記憶を封印し、転校先で居場所のなかったMや、同じく被災し、ボランティアの方に話を聞いてもらい救われたという経験から、恩返しをしたいという覚悟で参加したHについての報告があった。

会場からはこの取り組みの校内での位置づけやねらい、MやH以外の生徒の気持ちなどについて質問があり、劇にしたり紙芝居にしたりなどの今後の活動の伝え方についての提言などもあった。外国人や被災経験の差別の現実の中で、変わりたい、逃げたい、関わりたくないという意識が、生徒の気持ちを受け止める丁寧な教員の関わりや多くの仲間と繋がり変わっていく様子から改めて、自主的な組織の活動の意義が確かめられました。

鹿児島県同教（湧水町立吉松小学校）今村和代さん「『すごい』じゃないの。『ふつう』なの～胸を張って生きるための学びを～」では、A地区での解放子ども会「エース会」。親たちは「子どもたちには堂々と胸を張って生きてほしい」「（部落の人の生き方は）『すごい』じゃないの。『ふつう』なの。差別する方がおかしいと思えたらいい」と語り、子どもたちは差別の現実や親たちの生き方について学習している。「バラス採りの仕事」の話を地域の方から聞き、エース会の子どもたちは紙芝居にして解放文化祭で発表した。「みんながエース会になればいいのに」という願いを受け、学校では「バラス採りの仕事」の授業をし、差別に出遭ったときに「差別する方がおかしいよ」と返せ、部落の子が部落のことを書いた作文をふつうに読める学びを作っていきたい。という報告であった。

会場から、法が切れて解放子ども会が減っている中、解放子ども会で部落の親の果たしてきた役割やその意義や、エース会についての質問や学校での「バラス採りの仕事」の授業についての討論があった。今後の解放子ども会の運営や「部落を伝える場」が減ってきていることから、地域での取り組みや学校の果すべき役割が広がっている中で、学校として課題が明らかになった。

千葉県同教・東葛同研（千葉県立関宿高校）今井勝さん「A一家とかかわるスタートによろやく立った？」では、A一家との出会い、またレポートを仕上げる中でのA一家との関わりを通して教師自らが変容していったこと、また、Aに「部落を伝える」までの、父と子、母と子、父と母を繋ぐためにどのように関わったか、部落を伝えた後のAの立ち上がり、部落研での活動などの様子が報告された。

会場からは「母親に（部落の）話をさせていないのではないか」ということについて

議論があり、自分の心の痛みを自分から開いていくことで語られるようになるのではという意見があった。また、A本人からは「自分が部落を否定的にとらえていたら今の先生ならどう話してくれるか」との質問があった。また、Aの父からも今村さんのこれまでのかかわりでの成長の様子やこれからも期待していることについての発言もあった。A家族に関わることで教員が誠実に自分をさらけ出すようになり、部落をどう伝え、どう広げていくのか今までの自分を振り返り、部落問題に関わることで心豊かになっていくとする教員の感性の大事さを示すものでした。

【教訓的な事柄】

- ・解放子ども会が無くなり、厳しい背景を持たされている子どもたちが、親の話聞く機会、出会い、繋がる場が奪われている。だからこそ、地域や学校がより大事にされなくてはならない。
- ・子どもが差別の現実に向き合い、主体的に立ち上がっていくときには、親と繋がり、生徒同士が繋がりそして、教師との繋がりが必要になってくる。繋がる際には教員の感性が大事にされ、誠実や熱意が伝わなければならない。
- ・自分にとっての部落とは、あるいは部落認識を伝えること、そしてその場を作っていくことの大切さをこの分散会通して感じ共有できた。

【今後の課題】

- ・差別の現実の中、あるいは厳しい生活の事実に関わり教員が気づき出会うことから同和教育の実践が始まる。昨今、集会所が無くなったり、混在化進む中においては学校の役割が増しているが、ひとりの生徒にこだわり関わることから、子どもの生活実態や差別の現実が見えることがある。
- ・会場の参加者が2日目、2日目の午後と少なくなっていた。また、止むを得ないことではあるが、会場での参加者はレポートが終わると入れ替わるのが残念である。分散会ごとの総括を皆の共有のものし、持ち帰っていけると良い。その点においては、報告者は全部の報告を聞いて自分の成果・課題や分散会の成果・課題を共有できたと考える。